

私の研究人生とサステナビリティへの挑戦

東京大学大学院経済学研究科 教授
20 回生 松島 斉



■はじめに

このたびは、邦友会プロムナードへの寄稿の機会をいただき感謝申し上げます。先日同窓会に参加した際、編集長である金山逸郎さんから「寄稿してみませんか」とお声がけいただきました。最初で最後の機会と思い、即座に快諾いたしました。金山さんと私は

1979 年に駒場東邦を卒業した「花の 20 回生」として、6 年間の学生生活を共に過ごしました。私たちの世代は、駒東で特別に大切にされていたような、そんな気がする仲間です。

■文芸散歩と自己変革のきっかけ

思い出深いエピソードのひとつに、中学 1 年の夏、雑誌文芸部で参加した「文芸散歩」があります。本州各地の文学ゆかりの地を、小林國雄先生をはじめ部員全員と約 1 週間かけて巡る旅でした。初めて夜行列車に乗り、上野駅から北へ向かった旅は、恐山での宿泊や太宰治の生家である斜陽館の滞在など、文学と歴史の息吹に触れる貴重な経験でした。青森駅では、聞き取れない方言に戸惑いながらも、廃車となったバスを改装したボロボロのラーメン屋で食べた、絶品のラーメンの味が今も忘れられません。当時、高校 2 年生だった先輩方の優しさにも触れました。過保護に育った私にとって、この旅は人生における大切な記憶となり、何度も思い返す宝物です。

一方、当時の私は自己肯定感が低く「問題児」そのものでした。英語は大の苦手、数学の宿題はしばしば忘れ、教室の後ろに立たされると分かっているながら宿題を拒む強情さもありました。運動も不得手、普通のことが普通にできず、成績もさほど振るわない。加えて、自己中心的な性格が次第に顕著になり、モラルも低下の一途をたどりました。高 3 が近づくにつれ、「このままではどうなるだろう」という不安に苛まれるようになりました。

そんな折、母が重い病気にかかり、父の仕事も低迷するという家族の危機に直面しました。この状況は私にとって転機となりました。これを機に、本気で勉強に取り組む決意を固め、1 年間計画的に受験勉強を進めた結果、東京大学に合格できました。苦手だった英語は、過去問を日本語訳で読み込むという裏技(?)で克服しました。当時はリスニング試験がなかったため、こんな方法でも乗り切れたのです。

■大学時代と宇沢弘文先生との出会い

大学で様々なことを学びたいという強い意志が芽生え始めました。私が合格したのは文科Ⅱ類でしたが、文Ⅱの学生は自動的に経済学部に進学する仕組みでした。そのため「ネコ文Ⅱ」と揶揄され、駒場キャンパスに生息する生物の中で猫より勉強していないと言われるほど問題視されていました。向学心に燃えていた私は、自分の居



場所を求め、様々な分野や人々との出会いを大切にしました。そして経済学部に進学し、宇沢弘文先生のゼミに参加することになります。この出会いが、私の人生を紆余曲折の末今日へと導く大きな転機となります。

宇沢先生は、その個性的な人柄や風貌、強烈なユーモアで知られ、アメリカ経済学界で圧倒的業績を築かれた後、日本に帰国されました。しかし帰国後は、アメリカ中心の主流派経済学を「制度の役割を無視した空論」と厳しく批判するようになりました。

先生が帰国された当時の日本は、高度成長期真っただ中で、自動車産業が台頭していく時期でした。宇沢先生は一般向けの新書で、自動車もたらす環境破壊や子供の安全への脅威など、当時あまり意識されていなかった広範囲にわたる社会的費用を鋭く指摘されました。この影響もあり日本は比較的早い段階で公害や環境対策に踏み切りました。アジアの経済発展の状況と比較すると、先生の影響力の大きさは計り知れません。

これに呼応して提唱された宇沢先生の「社会的共通資本」という概念は、現代のサステナビリティの理念に深くつながるものです。この概念は、私たちが共有する資源や空間を持続的に維持する仕組みの重要性を説き、多くの人々にとって新たな視座を提供しました。

しかし、ゼミ時代の私は先生の教える理解することができませんでした。先生に連れられて精神科病棟を訪れるという貴重な経験もさせていただきましたが、極端に自己中心的だった私はその価値を実感できず、鈍い反応しか示せませんでした。それでも、宇沢先生の強烈な印象と体験は、深く私の記憶に刻まれ、後の研究人生を形作る大きな要因となります。

■ゲーム理論との出会いと研究の苦難

この時期、私は経済学の理論の形式的な美しさに強く惹かれ、苦手だった数学を駆使して研究に没頭するようになりました。その中で出会ったのがゲーム理論です。ゲーム理論は、数学者フォン・ノイマンと統計学者モルゲンシュテルンによって始められた、経済学のための応用数学です。現在、ゲーム理論の関連分野から多くのノーベル経済学賞受賞者が輩出され、優れた日本人研究者も多数いますが、当時の大学ではまだ十分に浸透していませんでした。

私は大学院に進学し、宇沢先生の師にあたるレオン・ハービッツ先生が開拓したメカニズムデザイン理論に取り組むようになります。メカニズムデザインは、当時のゲーム理論の先端領域であり、私はアメリカでの研究動向を意識するようになりました。この頃になると、数学は私にとって第二の言語のようになり、頭の中で数理が踊るような感覚を覚えました。研究が楽しさと挑戦に満ちたものへと変わりました。

しかし、本来の第二言語であるべき英語

は相変わらず苦手なままでした。大学院生にとって、アメリカの主要大学に留学して博士号を取得することが出世街道とされます。多くがアメリカで博士号を目指す中、私は TOEFL の低得点に阻まれ、留学を断念せざるを得ませんでした。東大の大学院は徹底した放任主義で知られており、試験もなければ授業すらありません。危機感を

覚えつつ、1980 年代中ごろの好景気とは裏腹に、みじめな院生生活を送りました。そんな中でも、私はゲーム理論の論文を 3 本執筆できました。それも英文でです。しかし、最初のうちは海外の専門誌に投稿しても「英語で書いてこい」（英語で書いているにもかかわらず）といったレターが返ってくる始末でした。それでも徐々に評価が変わり、「何が書いてあるかわからないが、重要な内容かもしれない」というレターが届くようになり、光明が見えてきました。

数学についても多くの課題を抱えていました。数学的な証明に対する理解が不足しており、論文の中で「Obvious（明らか）」とだけ記して証明を省略することもしばしばありました。頭の中ではだいたい理解しているつもりでも、それを人に伝える術がわかっていなかったのです。

そんな未熟な私を支えてくださったのが、数理ファイナンスを専門とする小林孝雄先生でした。小林先生は、私の悲惨な英語力と数学力を改善するため、根気強く指導してくださいました。そのおかげで、なんとか論文を完成させ、学術成果を形にすることができたのです。

当時の大学院では博士論文審査が形骸化しており、多くの優れた先輩方が博士号を取得せずに就職していました。私は血と汗の結晶を認めてもらいたい一心で、各先生方に直談判を繰り返しました。その結果、最終的に審査を受け、博士号を取得できました。この一連の努力は、後に年長の大学院生たちが博士号を取得するきっかけとなり、博士課程正常化への突破口を開くことになりました。

■国際的な評価と共同研究の成果

3 本の論文の中でも、特に私が気に入っているのは、社会的選択理論をゲーム理論で分析した研究です。これは、ハービッツ先生のメカニズムデザイン理論に対する私なりの答えとして生み出されました。当時、「望ましい社会的決定の方法が存在しても、人々が必要な情報を正直に提供しないために、それが実現不可能になる」という不可能性定理が広く知られていました。この課題に対し、私は「最適な社会的決定を厳密に実現するのは難しいが、近似的には実現可能である」ことを（みなにわかる形で）証明することに成功しました。

振り返るとオタク的なチャレンジでしたが、この論文は海を越えてアメリカの学会で取り上げられ、話題になりました。この事実を知ったのは、留学した友人から国際電話をもらった時でした。「学会でアブルーがお前の論文を解説している。」アブルーとは、当時若手のホープだったディリップ・アブルーのことです。その後、アブルー先生からいただいた手紙には、「そんな孤立したところで研究せず、アメリカに来なさい」という文面が綴られていました。

現在では日本で研究をしても孤立しません。しかし、当時はインターネットなど存在せず、海外の研究動向を知ることは困難でした。限られた情報で想像力を巡らせ、オリジナルな論文に仕



上げるしかありません。情報の差によって、海外で同じテーマを研究している人に太刀打ちできないこともあったのです。

みじめな研究生生活の結晶が知らないところで話題になっていると知った喜びは、自己肯定感の低かった私にとって大きな自信となりました。自分の持ち味を認識し、経済学の発展に貢献することが研究者として

の使命であることを自覚するようになりました。

その後、アブルー先生のお誘いに応じ、スタンフォード大学とプリンストン大学で各 1 年間研究生生活を送る機会を得ました。共同研究がスタートし、新しいアイデアを盛り込んで、より強力な可能性定理を完成させました。この成果は、社会的選択理論分野の長年のパズル探究に終止符を打つもので、集大成と呼ばれるまでに至りました。

このころには英語で論文を書くことに抵抗はなくなっていました。話したり聞いたりするのは相変わらず苦手で、それは今日まで続いています。アブルー先生とは言語の壁を超えた不思議な関係が築かれました。私が「アイムコンポーシング」と言えば、彼は「ユーアーパッキング」と理解するといった具合に、意思疎通が独特の形で成り立つのです。

■サステナビリティの経済学への新たな挑戦

私は 1994 年に東京大学の助教授に就任し、2002 年に教授に昇格しました。翌 2003 年には、The Econometric Society の終身特別会員に選出されるという栄誉をいただきました。私の研究の中心にあるゲーム理論は、人々の相互依存関係を解明し、協力や競争のメカニズムを探る学問です。社会が人々の相互依存の上に成り立っている以上、この理論を通じて、豊かで持続可能な社会の設計に貢献したいという思いを抱えてきました。

しかし、21 世紀に入り、経済学の社会的影響を考える中で、学問の枠組みそのものを見直す必要性を感じるようになりました。2015 年に国連が掲げた SDGs(持続可能な開発目標)は、短期的な GDP 成長を超え、未来世代や自然環境との共生を目指す視点を示しています。この背景を受け、私は経済学やゲーム理論を改良して、サステナビリティの実践に貢献できる枠組みを模索し始めました。

こうした取り組みは、経済学の主流派から「時期尚早」と見なされることが少なくありません。しかし私自身の研究者人生を振り返ると、宇沢弘文先生が提唱した「社会的共通資本」の考え方こそ、現代の経済学に欠けている重要な要素だと痛感しています。

最近、私はこの新しい挑戦の宣言書として、「サステナビリティの経済哲学」という新書を出版しました。批判的視線を向けられましたが、多くの分野の研究者や実務者から強い共感をいただくことができました。環境や未来世代への貢献を強く望む一方で、営利活動との両立に課題を感じている人々が、日本に幅広くいらっしゃることを実感できました。

私は 2025 年 3 月に東京大学経済学研究科を退職する予定です。そして、私と同じような志を持つ官民学の仲間とともに、「サステナビリティの経済学」に取り組む計画を立てています。人生最後の挑戦です。少しでも社会に貢献できればと願っています。

ハービッツ先生をはじめとする先人たちは、80 歳を超えても高い次元の研究を続けられました。私もまだ道半ば。新たなチャレンジに向き合い、研究者としての人生を存分に楽しみたいと考えています。